

全校のみなさん、おはようございます。

十月も半ばを過ぎ、夏場に比べ過ぎしややすい気候となりましたが、日中の寒暖差から体調を崩さないようにしたいものです。

さて、「実りの秋」ということで、この時期になると、各地で農産物の収穫がピークを迎えています。とりわけ信州産のものは、アルプスから流れ出る清流と肥沃な大地で育まれており、その味は格別です。ところが、近年異常気象の影響から、採れるものが採れなかったり、状態があまりよくないものが多かつたりするそうです。「今年の出来はよくないな」「毎年、楽しみにしていたのに」、なんて声も聞こえてくるそうですが、自然が相手のことなので、どうすることもできません。

親鸞聖人は『歎異抄』で「われもひとも、よしあしということのをのみもうしあえり」（後序）と、人の世を「よしあしの問題ばかり言い合っている」と言われました。

先程の農作物の出来不出来、天候のよしあしを含め、景気のよしあし、成績のよしあし、時にはよく知らなくせに、噂や報道を鵜呑みにして人のよしあしを決めるなど、思い返せば、世の中があらゆるものに「よしあし」のレッテルを貼っているようです。

私たちも普段の生活で、なんでも「よしあし」で決めつけてはいけないことはわかっているながらも、実際は、「よしあし」をつけることが多分であり、「よしあし」をつけないと生活できない現実があります。

親鸞聖人は、「自身の目の前にある問題の原因を状況や「ひと」のせいにし、そのことを善し悪しの分別心で乗り切ろうとする「われ」をいつも棚上げにしている」と、自分自身を厳しく見つめています。

この言葉は、私たち人間の「よしあし」の基準は自分の都合によるものだということを教えています。ここに気づかぬままに、都合の悪い内容を「あし」と切り捨て、一方的に自分の都合の良いものを「よし」としているところに、私たち人間の愚かな姿があります。

釈尊は縁起の法で、「あらゆる物事は単独では存在せず、様々な因と縁が関わり合って成り立っている」と説かれました。物事は理屈で割り切れるほど単純ではありません。それは私たち人間も同じことではないでしょうか。そんな複雑で明確ではない私たちが自分の都合だけで、互いに批判し、差別し、傷つけ合うのはあまりにも悲しいことです。

顔を上げると目の前には、「よしあし」では片づけられない「ひと」がいます。その想像力こそが、今まさに「われ」に問われているのではないのでしょうか。